

もしも織斑一夏が現実的だったら

舞波@現在進行形ゴールデン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現実的な善人、織斑一夏。彼は世界の先を行く。

「世界にはお前の当たり前が

出来ない人間が幾らいると思う？それすら分からないんならーーーーその命、神に返せ」

原作で色んな意味で規格外な一夏がもしある程度現実的な思考ができたら？というifのお話。基本原作通りですが、細かく変わったり、趣味がなんか作者色に染まっていたり。あとタグに書ききれないのでここに書きますが、ポツポツFate要素があります。

目次

プロローグ

2人暮らして早3年	1
人物設定その他諸々	4
第1章 『戻る』 為の始まり	
意味知らぬ者達の巣窟	8
白くて明るい亡霊な職場	11
女だったら偉いのか	20
それが俺の日常だ	27
見せてもらおうぞ傲慢の果てを	31
俺を呼ぶなら	36
再会と暴露と告白と	44
稀少価値とはステータス	52
氷結解除で（約2ヶ月ぶりに）俺達、参上！	55
Rの怒り／荒れる炎とフライト&ガン	58

プロローグ

2人暮らして早3年

「もうじき雪が降るな…そろそろ暖房出すか」

俺は織斑一夏。基本的には何処にでも居そうな中学三年生である。普段着がまるで神父服みたいなのを除いては。と言っても、下は普通の黒ズボン、上はこれまた黒いローブのようなものだが。

今は11月下旬。ほぼ年中長袖長ズボンの俺はともかく、妹は寒さに弱い。まあ、一般人として生活していながらも、俺は学校に通っていないのだが。妹の方は4歳離れた11歳だが、そちらも同様。まあ簡単に言えば飛び級したのだ。

「うゝ…おはよ、お兄ちゃん」

「おはようマドカ。今日もココアでいいか？」

「うん…」

パジャマ姿で眠たそうにしながらきたのは妹の織斑円夏。

彼女と初めて会ったのは、俺が一人暮らしを始めて半年頃のこと。なんかよくわからない組織に囚われて色々悪い事をさせられていたらしく、それを束さんが救出して来たのを引き取ったのだ。実家の愚姉弟は知らないが。

「今日寒いね、本当ダメだよ、私」

「だろうな。もうじき雪が降るだろうさ。後で暖房を出すから手伝ってくれ」

「うん、わかっひゃ…ふあゝ」

ピンポン♪

「おっ、今日も来たな」

ガチャ。

「おはようございます、東さん、クロエ」

「ぐっもーにんぐー！いっくん、マドちゃんは？」

「おはようございます、一夏様」

「円夏なら寝ぼけ眼でココア啜ってますよ。朝食出来てますし、食べ

てきます?。」

「頂くとも!。」

「頂きます、一夏様」

この人は篠ノ之束。明るい人だが割と苦勞人である。何せこの人はインフイニット・ストラトス、通称ISの製作者だからだ。

この世界は現在、女尊男卑に染まっている。その原因は、女性しか使用する事の出来ないパワードスーツ、ISの影響だった。それは既存の兵器を遥かに凌駕し、たった一機であろうと世界のパワーバランスを崩しかねないということんでもないもので、そしてそれを使えない男は女より劣っている、という如何にも短絡的な思考が今のこの世界だった。

では、何が苦勞人なのか、それはそもそもISのお披露目の場から始まる。まず、白騎士事件、と呼ばれているこれは、実はとてつもない偶然でミサイルが一斉発射されたものだった。一説には新たに戦争を仕掛けようとした某国に対しそれを撃ち墜とそうとしてそれをまたー、という流れでミサイル地獄が完成したとか。実際には不明。で、それをヤバいと思った束さんがそれを白騎士で撃ち落としてしまった為、兵器として認識されてしまったのだ。無念である。

ちなみに俺と円夏が飛び級できたのは束さんの協力である。本当、感謝しきれない。

「どしたのいっくん、固まっちゃって」

「いえ、ただ、俺も円夏もそろそろでしょう? IS学園」

「そーだねー、心配事とかある?。」

会話の隅で円夏がはいっ、はいっと手を挙げているので視線をそちらに向ける。

「私向こうに多分いるだろう愚姉弟に会うのが凄い憂鬱だよ…」

「ま、だいじょーぶだいじょーぶ！2人ならパーソナルデータ及び技術でも負けないから！」

「お二人が頑張っているのは私も見えましたし、心配事なんて問題にもなりませんよ！」

「ありがとうございます。それもいいけどそろそろ食べますか」

そのあとはゆっくり朝食を楽しんだ。

人物設定その他諸々

白陽一夏

旧姓：織斑

基本的にかなりの好青年であり、常識派。学園制服は上着の丈を膝辺りまで伸ばし、フードを付けている。あまり活発ではなくダウンナーな印象を受けるが日課は毎日1時間のIS訓練と町のゴミ拾い。外出時は一つ良い事をするのがルール。ISの腕前は：作中最強。でもチートとかではない。首にはロザリオをかけている。生活資金は束に教わった株で稼いでいる。今のところ負け無し。ギャンブル強い。尚、女尊男卑が始まる前からISに乗れることは束から聞いており、中学3年間の間毎日訓練していた。好物は麻婆豆腐。めっちゃ辛い。あと我流の八極拳を使う。

白陽円夏（マドカ）

旧姓：織斑

一夏の妹で織斑の末っ子。原作通り亡国に所属していたが完全に毒される前に束によって救出。その後は一夏の家で2人暮らし。尚彼女も天才である。明るく活発で重度のブラコン。犬かと言わんばかりの甘えっ子。ナノマシンを打ち込まれている為見た目とは裏腹に頑丈。制服はこちらもフードを付けており、緩めの長袖（パージ可能）に後ろだけ長いスカートである。ISの腕は一夏未満だが凄まじく強い。こっちもロザリオかけてる。食の好みは一夏に毒されて麻婆豆腐である。

篠ノ之束

IS開発者にして恐らく作中一の苦勞人。これまでの経緯が経緯なだけにかなり真面目。なんかヤバい妹と大事なところで子をほつたらかす親の元で育った為、彼女が真面目にならざるを得なかった。面倒見が良く、2人の為に色々手を回している。ただ、一夏が株のやり方教わってきた時は驚いた。彼女の連絡先を知るのは身内（もとの家族と一夏・円夏）と学園長のみ。

クロエ・クロニクル

東の娘。原作とは違い東の遺伝子を弄って造られた為名実共に東の娘。見た目は大人びているが少女趣味で、産まれた理由的にもまだ10歳未満である。あと家事は料理を含めて上手。料理を含めて上手。大事な事なので2度言いました。見た目とのギャップが可愛い。

織斑のたわけ

千冬

家事が駄目すぎる女。慕われてはいるが真実を知る者は胡散臭いと思われている。

秋十

基本的な事は出来るが致命的なものが足りないオリ弟。一夏を見下していた。使用機は白式。

住居

織斑邸

現在進行形で荒れ放題。家事をする人がいない為である。その為度々業者のお世話になる。

東のラボ

絶海の孤島にある。何故か電波がダンスしてんのかと言わんばかりに乱れる為選ばれた。ちなみに東には乱れなんて関係無い。

とあるマンション

一夏と円夏の住居。マンションにしてはかなり広く、部屋が余っている。ちなみに一夏が買い取っている。

機体紹介

イクサ

モデル・仮面ライダーイクサ

武装

・フエツスル

今作ではカリバーとナツクル、ライザーのみ。

・イクサナツクル

キバ本編と変わらない装備。同時に待機状態でもある。ベルトに装着するのは変わらないが無論武器としても使用可能。威力調整ができるので対人でも使える。

・イクサカリバー

こちらも基本変わらず。ただし大きくなっている。

・スヴェル

元ネタは北欧神話の盾。現段階で唯一の非固定浮遊部位。アンロックユニット。自由自在に動く上に分離機構を有しており、盾の外側が2つの双刃カッターになり、中央部にはマシンガンとパイルバンカーが仕込まれている。尚中央部には持ち手も付いており、変形しなくてもパイルとマシンガンは使える。

・Cコマンドオーダー・Oシステム

単一仕様能力ではなく単なる機能。一夏が即興で考えた技をメモリーし、元々有ったように再現する。イメージ自体は一夏のものでそのまま流用している為物理的に無理だろうが実行できる。

単一仕様能力

『チエックメイト』

相手がある程度弱っている時に使用可能。所謂必殺技である。装甲を無視して相手にダメージを与える。大体30%ぐらいなら一撃。

『万昇暗夜』

束が作ったわけでもないのに白式に積み重ねていた零落白夜と対を成す：どこの話ではない力。ある意味真逆の性質を持っており、切れば切るだけSEを回復する。威力自体は1.5倍。

尚、イクサには白騎士のコアが使われている。コア内AIとして既に何度か一夏と会話している。容姿は金髪で5歳ぐらい。イクサの見た目だが飛行可能であり、軽量なのもあって燃費も良い。

旋風・破邪

武装

・解体ナイフ

ISリムーバーの技術を転用したもの。対象を例えどんな物であろうと『一』として切り、『二』へと分断する。装甲をどんどん切り剥がす。

・針狼

先端がドリル状の針を飛ばす。主に敵の装甲の継ぎ目を崩す他、転ばせる為にも使われる。

・暴風帝

風ではなく、ビームを撃つビット兵器。円夏が速度中心で戦う為竜巻のようなビームが出る。狙い撃ちすれば通常の2倍の弾速を持つ。

・死流

物体誘導用のアンロックユニット。使用する為には停止しなければならぬが固定されようが核撃たれようが空気撃たれようが全て逸らす。

単一仕様能力

『スクラップパー』

相手ISのコントロールを強奪する能力。基本的に相手を捉えて地面にガンガンぶつける為に使われる。やるのは危険だが絶対防御の機能すら停止できる。

第1章 『戻る』為の始まり 意味知らぬ者達の巣窟

新学期が始まる3日前。俺と円夏はIS学園の正門に立っていた。それにしても昨日は色々大変だった。思わずふう、と息を吐く。

「お兄ちゃんの今のため息って、やっぱり昨日の?」

「まあな。仕方ないが、多少は疲れる」

東さんはストレスを溜め込む性格である。ましてや自分の夢たるISによつて現在進行形で苦しむ人がいるのなら当然だ。数カ月一度の爆発がきてしまったらしく、俺に抱きつきながら世の中への怒りをぶちまけていた。まあ、円夏もクロエも見えていたのだが。何であれ東さんの為にできる事なら何でもする。

それと俺には夢が無い。だが東さんの夢は兵器として使われてしまっている。俺と円夏のISは東さんが『唯一』完全戦闘用に作った物。ISを兵器だのスポーツだの言ってる奴らは許せない。

そんな事を考えていると1人の男性が出てきた。この学園の学園長にして知り合いの轡木十蔵氏である。

「どうも一夏君、円夏さん。ようこそIS学園へ」

「お久しぶりです、学園長。今回の件の協力はありがとうございます。ほら円夏も」

声には出さないものの真面目な顔でペコリと頭を下げる。ちゃんと挨拶ができたのでスリスリと頭を撫でる。

俺達と学園長が知り合いになったのは元々東さんの知り合い…というより相談役だったらしい。かつてISは学会にて否定されたが、唯一肯定してくれたとの事。その縁あって表に出れない東さんの代わりに俺とクロエで訓練用ISの修理をしに来たのだ。そのツテで部屋割りの方も兄妹一緒だ。

「俺達のクラスの担任は誰ですか?」

「申し訳ありません…、織斑先生のクラスに…」

「気にしないで下さい。この時点でかなり融通を利かせてもらって

るのは分かります。文句は言いません」

「えっと、学園長先生。あんなの蠅と変わらないですから」

頭を下げられるのには慣れていない。そもそも今の俺達なら奴すら雑魚だ。

「しかもまだ報道されていませんがあなたの兄の…」

「あの道化が？まあ血筋的なものですかね。俺は元々乗れる事を聞かされて訓練してましたし」

「ISを力とか思ってるだろうね、バツカみたい」

「それはそうと食堂はまだ開かないんでしょう？荷物纏めたら買い出しに出掛けたいんですが、許可貰えますか？」

「どうぞ。まだ職員達も詳細は聞かされていないのである程度自由にしてくださいって平気です」

「了解しました。行くぞ円夏」

「うん！」

渡された地図を頼りに寮に向かい、部屋に入る。元々2人部屋のようだがそこそこ広い。流石無駄な税金の塊・国家機関。部屋に着くと荷ほどきをし、どちらのベッドを使うか決める。

「窓側はお兄ちゃんが使っていていいよ！」

「なら御言葉に甘えるでしょう。と言っても、どうせ夜2人で寝るつもりだろう？」

「テヘペロ♡」

悪戯がバレた子供みたいな顔で認めた。まあ、結局いつも通りだ。荷物からいくつかの小瓶を取り出し、机に並べる。

「それって香辛料？持ってきたんだ」

「うちの麻婆の味はこれでなければ出ないからな。夕飯は何にする？」

「激辛麻婆!!？」

「分かった。じゃ、行くか」

この辺り一帯の地図は既に渡されている。学園内で食材も買えるらしいが今は開いていない。最寄りのスーパーへと向かった。手を繋いで歩いていると円夏がふと疑問を口にする。

「そう言えば今日は訓練するの？」

「まだ目立つわけにもいかないからな、始まるまでの三日間はゆつくり休むつもりだ」

「ならこの辺りがどうなってるのか見に行こうよ！」

「偶にはそう言うのも有りか。ならそうするかね」

買う物は麻婆の材料と米だけだったので買い物自体はすぐに終わった。部屋に戻って早速麻婆を作る。

「私これ好きだけど食べる度に運動しなくていいんじゃないかなって思うよ」

「この辛さで堪えるようではまだまだだな」

これでもこの麻婆、円夏が食べれるギリギリまで辛くしている。まあこの辛さを食べられるなら充分辛党だろう。俺は超辛党だ。こんな感じで汗をかくので風呂は麻婆を食べた後。今年で12歳になる我が妹は俺と風呂に入るのを止めようとはしない。

「ほら、目を瞑れ」

「ん」

わしやわしやと頭を流してやる。果たして世間一般から見たこれはかなり危ない絵面なのかもしれないが、円夏はこれがお気に入りなのでそれを止めるように言ってくるのを想像できない。その後はこつちが背中を流してもらい、湯船に2人で浸かり、同じベッドで寝た。

白くて明るい亡霊な職場

朝。起きると既に10時過ぎていた。何となく指が温かい気がして見てみると、円夏が俺の指を啜っていた。完全に寝ているので無意識である。偶にある事だが時間が時間なのでついでも明かす事にする。指をくすぐる様に動かす。

「んにゅ、んう、ん、ん、ふぁ…?」

「起きろ。今日は用事があるだろう?いつまで啜えてる」

「あ…ご、ごめんお兄ちゃん!!?//////」

「目は覚めたか。早く用意しろ」

本日は束さんの用事である人と重要な話をするのだ。三年生の寮に向かう。待ち合わせはその食堂だ。

「今回はわざわざありがとうございます、ダリル・ケイシーさん」

「あ、ありがとうございますダリル先輩」

「あんまり堅苦しいのはやめてくれ、こつちがやりづらい」

今回の用事の相手は3年のダリル・ケイシー、ひいては所属する組織、亡国機業だ。円夏は少し萎縮しているが、向こうで自分より上の人間だったからだろう。

「えーと確か篠ノ之博士の使いだよな?ウチの組織に何かしようとも?」

「いえ。寧ろ逆です。御宅の組織がこの学園で何をしようと邪魔をしない、という趣旨を伝えに来ました」

「へえ?幾らウチらに恩があるからってそれで良いのか?」

恩というのは円夏を取り戻す過程の話である。簡単に言えばかなり過激な裏組織に円夏は捕らえられていたのだが、その組織を亡国が潰し、そのまま保護された。で、それを細かい技術提供に来た束さんが知り、引き取り俺の所に来た…まあ大体そんな感じだ。

「それについては俺と束さんがこの学園にあまり良い感情を抱いていないからです」

「ま、ここは甘ちゃんが多過ぎるよな?やろうと思えば三重苦とか全く意味のないものになるかもしれねーからな。学会のお偉いさんは

兵器好きか？まー何にせよ納得したぜ。上には伝えといてやるよ」

「ありがとうございます。それではルーラー」

「あー、すまん。一つ個人的な用を頼まれてくれねえか？」

「ダリル先輩の個人的な用？」

円夏はきよとんと首をかしげる。

「ウチのが風邪ひいて、看病してほしいんだが…」

「は」

「それにしてもまさかこんな場所にビルを建てているとは…」

「誰も気づかないだらろーね」

駅近くのビル群、そのど真ん中。裏世界ではかなり有名な組織、亡国機業。日本に有るのは多分IS関係の変化が最も伝わり易いというのと、更識家が有るからだろう。俺達としては『法では裁けない悪を斬る』方針なので奴らは敵と言って間違いないだろう。まあ向こうが仕掛けて来なければこちらも向こうに何もしないが。

「取り敢えず入るか…」

「そうだね…ってわっ!?？」

入ろうとすると、中から白い大きな影が円夏に飛び込んで来た。それはルーラー

「くすぐつたいよう、ルーク」

ワン、と鳴くそれは狐と犬が混じったような白い毛の生物だった。少し解りづらいが多分犬だろう。

「知ってる犬か？」

「うん！ここの番犬のルーク！」

「ワン！」

「かなりデカいな？」

「…それについては中で話すよ。早く入ろ」

入ってみると案外普通の企業だった。見た所IS関係であるのは間違いがないが。と、入って来た俺に妙齡の女性が声をかけてきた。

「貴方：知らない顔ね。ここに何の用かしら？」

「初めまして。織斑一夏と申します」

「織斑：？じゃあ隣のその子は…」

「お久しぶりです、スコール様：ってわわ」

「Mじゃないの？久しぶりね。まーた可愛くなっちゃって」

素早い動きで抱き上げられた円夏は背丈の差で足がつかなくなり、抵抗できないようだった。

「そういえば貴方たちどうして来たの？」

「御宅のダリル・ケイシーさんに東さんの使いとして話をしに行ったら風邪をひいた奴がいるから看病してやってくれと…」

「東博士の！？ちよつと来てくれるかしら」

東さんの名前を聞いた途端なんか連れて行かれる。あ、多分ダリルさん、ついでに例の話も俺たちにさせるつもりだったな？

「あ、そう言えばお兄ちゃん」

円夏が小声で呟く。

「ルークはね、元々はバカな科学者が行なった『ISを動物に使用させる』実験でできた、遺伝子改良された犬なの。元は犬と狐のモノが使われてて、普通の動物より頑丈で長生きで、造った所は潰されたんだけど、ほつとくワケにもいかなかったからここで飼われてるの」

中々興味深い話を聞いた。ISの実験に動物を使う…もし起動できさえすればISが一体何に反応して起動してるか解るだろうし、場合によっては生体部品化すれば……。少しマッドな事を考えていると『会長室』と書かれた部屋に着いた。中にいたのはかなり威厳のある漢だった。

「初めまして。織斑一夏と申します。今回は篠ノ之博士の使いとして用件を伺いに来ました」

「…オウ。オレは牙研断斬。この亡国機業のトップをしている。何だ、その要件ってのは」

「篠ノ之博士及び博士に属する俺と円夏はあなた方がIS学園で何をしても邪魔をしません」

「…お前らに何の益がある?」

「俺達は半ば更識家とは敵対しているようなモノです。ならば敵の敵は味方、というでしょう?」

「良いだろう、その言葉信じてやる。更識の娘…楯無はつくづく邪魔だと思っていた所だ、ダリル以外に学園内に協力者がいるならこちらもやり易い」

「まあ、そこは任せて下さい。生徒会長権限ぐらいなら直ぐに剥がしてやりますよ」

不敵な笑みを浮かべていると、円夏が小声で突っ込みを入れる。

「お兄ちゃん、私達看病しに来たんだよね?」

「そうだったな。では最後にグレーゾーンな事について」

「…何だ?」

「一応学園所属になってしまうので、ここの機体と戦う事になるかもしれません。なのでその場合はなるべく大破させないようにするつもりですが、それについてはご容赦下さい」

「了承しよう、篠ノ之博士の使いなら信用できる。こちらも宜しく頼む」

「宜しくお願いします」

そこまでしてようやく会長室を出る。さて、これからが本題だ。

「スコールさん、その風邪の人は何処に?」

「一応医務室にいるわ。ただ今ある大掛かりな作戦で全員出払っちゃってて、医者が居ないのよ」

「わかりました。では早速」

「ありがとうね。私の大事な人だから、ダリルが気を使ってくれたんだと思うわ。今日休暇を取れなかったってメールまでしちやっただから」

「まあ多分今回の報告が面倒だったから、というのが半分くらいあり」

「そうですが」

「苦笑いしながら歩いて行き、ついたのは見た所かなりの設備が整った医務室だった。」

「私はここまでね。キッチンとかもあるからもし良ければ使ってね」「わかりました。後は任せておいて下さい」

「ごめんね。こつちが片付いたらなるべく来るようにするわ」

スコールさんは足早に去って行った。

「円夏、スコールさんってやはり上の人間なのか？」

「うん。幹部だつて言つてた。あと下の方の纏め役もしてるから仕事が多いんだ」

能力のある人間は人の上に立ち苦勞するものだ、更にこの手の組織の纏め役とは、それは多忙な日々だろう。

「まあ何にせよ中に入るか」

「そう言えば風邪ひいたのって誰なんだろうね？」

中はかなり清潔に保たれているようで、あくまでビルの一室とは思えない程設備が整っていた。病院特有の薬品の匂いも少しする。一番奥のベッドが使われているようだったのでそこを開けると、横になっていたのは長髪の女性だった。

「…つてオータム!? 風邪ひいたのってあなただったの!?!?」

「あー、うるせー…頭痛えから騒ぐな……つてM?」

「明日は雪でも降るの? 身体頑丈なのが取り柄だー…つて言つてたのに」

「あー、円夏、知り合いか?」

「オータムだ……怠い、以上」

そこまで言つて彼女は気を失う様に眠り始めた。寧ろよく今まで起きていたなと思う。試しに額に手を当てるとかなり熱い。俺の平均体温が37度1分だった筈なので、38度を超えているのは間違いない。

「本人が寝ちやつたあとだけで説明するね。私はここに保護された後、スコール様の部下としてお世話になってたんだけど、オータムはスコール様のお気に入り…というか恋人…なの」

「…そこらへんの事情は突っ込まない方が良さそうだな…にしても何で風邪をひいた事にあんなに驚いてたんだ？」

「私もだけど、ナノマシン投与してるし、元々オータムって頑丈だったし」

「俺も投与してるがあまり効果無いのか？」

「お兄ちゃんのは東さんのだから効果が段違いなんだってば…」

「つまりこのナノマシンは完成してないのか」

雑談も程々に、まずタオルを水に浸し、オータムさんの額に乗せてやる。湯を沸かし、米は水を多めにして炊き始める。後は起きると炊き上がりを待つだけ。

「始めれば呆気ないんだがな…」

「人がいないからね、だからどうしてもスコール様みたいな上層部の人は忙しくなっちゃう」

「ここまでの集団で事を起こすのは難しいだろうしな…円夏、何なら顔出しにでも行ってきたらどうだ？」

「いいの？」

「1人で事足りるしな。なんかあったら連絡する」

「じゃあ行つてきまーす！」

ぴゅーつと何処かへ走って行った。さて、俺は……

「あちい…つてえええええつ!?」

「起きたか、どうだ調子は」

「いやいやおま…！」

「ん？ああこれか。癖だ」

俺の手には6本の黒い短剣。それを只々磨いていただけである。

「心臓に悪い…具合悪くて起きたら自分の横で刃物磨いてたら驚くに決まってるだろ…」

「それはすまない。ところで食欲はあるか？」

「何とかな…自分で食うとなるとしんどいが…」

「なら食わせてやるか…」

持ってきたのは卵粥それに2種類の粉をかける。

「何かけたんだよ…」

「まあまずは一口。口を開けろ」

一瞬躊躇するもののすぐに口に入れた。食欲は確かにある様で何より。

「以外と…イケる？」

「その粉は香辛料だ。発汗しやすくなるモノと普通に風味づけにな」

その後は割と普通に食べていた。寝る前と比べて少しはマシに見える。

「汗はどうだ？タオルぐらいなら持つてくるが」

「正直気持ちわりいが動きたくねえ…」

なら円夏を呼ぶか。と考えた辺りで呼ぼうと思つてた妹はスコールさんと一緒に入つて来た。

「お疲れ…お兄ちゃん…」

「お疲れじゃないか、どうした？」

「ちよつと新人のパイロットをしごいてもらつたのよ。ついでにオータムの着替え持つて来たわ」

「丁度呼んで着替えるのを手伝ってもらおうと思つていたところだ。俺は出るので着替えさせてやってくれ」

「あ、それなら大丈夫よ。今日から明日まで休み取れたから、後は私が看病するわ。ありがとうね」

「そうですか。色々用意してましたがそれならそれで良かった」

「あと一応コレ、持つてって」

渡されたのは『対更識用マニュアル』と書かれたものだった。ご丁寧にブックカバー付き。

「ウチの構成員が纏めた更識がやりそうな手口・及び仕掛け方について書かれてるわ。念には念を、ね」

「有難うございます。時間もあるのでもう帰りますね」

札を言つて医務室から出る。時刻は午後6時半を過ぎていた。

「…疲れたよ〜…」

「おぶつてやるから問題無いだろう？夜は食えるか？」

「お風呂入つて、寝る」

ひよいと円夏をおぶり、速歩きするぐらいの速度で歩いていく。円夏はもう寝ているようで、寝息をたてている。それを見た亡国の人達がほっこりしていたが、つくづく此処が裏の組織だとは信じ難い。束さんは確か『IS被害者の会みたいなモノだよ』と言っていたが、それ故に元は一般の人間も多いのかもしれない。

「まあ、やるべき事をするだけかね」

帰りに簡単な食事を買う。学園に戻ったらまずは本に書いてあった『盗聴器の隠し方』に倣つて調べてみるか。

「円夏、そろそろ起きろ」

「んあ…ありがとうお兄ちゃん」

電車内でおぶり続ける訳にもいかなないのでここで起こす。風呂に入ればまた眠くなるだろう。

「長い1日だったな」

「うん……」

何気無く鍵を開けると中には――

「ご飯にする？お風呂にする？それとも…私？」

(恐らく) 裸エプロンの謎の痴女がいた。

「っ!!？」

2人同時に眼を見開き、臨戦態勢に入る。円夏は着弾起爆弾を装填した銃を二丁、俺は4本のワイヤーと3本の短剣、『黒鍵』を構える。

相手は知らないが確実に味方で無い事は間違いない。ワイヤーは両手足首に絡み付き、拘束する。

「貴女誰？何でここに居るの？30秒以内に言わないと内臓から破裂させてやるから」

「素人なのは見れば解るが…相手を考えろ、身の程を知れ」

「ちよ、何よこれ!!?」

驚いて答えないのにイラついたのか円夏は後ろに回り、背中に銃を突きつける。

「早く言わないんなら脊椎を捻り出すよ?」

「言う、言うわよ!私は更識楯無、ここの生徒会長よ!」

更識楯無。つまり早く現当主か。ここまであつさり捕らえられるのがトップとは…、トップとは…ふふつ。

「久々だね愉悦顔」

「どうでもいいだろう、それは。さて、お前は何故ここに居る?他人の部屋に勝手に入るのを許される程生徒会長とは大したモノではないぞ?」

「護衛と挨拶のつもりで…!」

「不審者に護衛される程弱いつもりはない。早く出て行け」

「服を置いてるからそれだけ取らせて!」

「30秒で支度しろ」

30秒以内に着替え終わると不審者は逃げる様に出て行った。

「更識って…」

「大した事はないな。恐らく人を殺した事も無いだろう」

風呂に入る用意をしながら盗聴器を探す。見つかったのは5個。いずれも書いてある通りだった。黒鍵で潰し、さつさと風呂に入る。もう食欲は失せてしまい、丹念に円夏の身体を洗って、軽く流し、3分程浸かってその後は早々に寝た。

女だったら偉いのか

今日はIS学園初日。昨日は寝坊やら名字が変わった事を伝えに行ったりと忙しく、結局何処かに行く気も失せてしまい、ネットで麻婆のアレンジレシピを見て時間を潰していた。

後はゲームだ。主に『覚醒し過ぎな手強いシュミレーション』をやっていた。流石に丸一日遭遇戦をしていると本編でのバランスブレイク具合がハンパじゃない。円夏はうりやーてりやー言いながら格ゲーをしていたな。

「誰…？あの人」

「何で男がここにいるのよ」

周りがボソボソ言ってるが致し方無い。1人目（正確には2人目）の男性操縦者については昨日テレビで発表されていたが俺は本当に一部の人間以外に知られていない。その為入学式にも出ずに、ある程度時間が経ってからこの教室に入って来た為、周りからは『正体不明の男』、といった辺りか。

「……………」

「お兄ちゃん、くすぐりたい」

俺は先程から無言で円夏を撫で回している。と、そこへもう1人の男が入って来た。昨日報道されただけあつてか、周りの声が黄色いものへと変わる。その愚者が席に着いた辺りで眼鏡の幼めな女性が入って来た。年齢は……二十代前半か。ISが東さん14歳の時に作られたモノなので学園教師となる年齢は大体が三十代から二十代までに限定される。

「皆さん、私は1年間このクラスの副担任を務めます、山田真耶です、よろしく願います！」

『……………』

元気に挨拶をするものの周りから返事は返ってこない。少し、いや割と半泣きになりながら続ける。

「うう…、SHRを始めます…」

その後は自己紹介が始まるが、基本スルーしていた。ただ男性操縦

者である織斑秋十になると話は別である。

「織斑秋十です。趣味は家事とスポーツです。気軽に話しかけてくれると嬉しいです」

『きやあああああああああああ!!?』

五月蠅すぎる。ギャーギャー喧しい。発情期か？

この自己紹介、25%ぐらいは嘘だ。小学校の間は俺に家事を任せっぱなしだった癖してよく言うな？そんな事を考えていると世界最強（笑）…じゃなかった織斑千冬が入ってきた。

「私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。お前らを一年で使い物になるようにするのが私の仕事だ。私の言うことには全てYESだ、分かったな」

『XX!!!!』

たかがその程度、いや問題発言にうるささ6割増しの高音波が発生する。もはや音として聞き取る事は不可。中には変態が混じっていったようだが聞き取れない。狂化しているのか？

円夏とお互いの耳を塞ぎあつて回避したが。音が止むとそのまま耳を弄る。

「くあ…、あう、だ、め…ふうっ…／／」

なんかだんだん楽しくなってきた。嗜虐心に火がつき始める一歩手前で自分の番になる。円夏が物足りない顔をしているが敢えてスルー。

「白陽一夏だ。趣味は株と鍛錬、嫌いなモノは女尊男卑に染まった人間、自意識過剰な奴。以上だ」

周りかざわめき始めるがそれを無視して円夏が自己紹介する。

「白陽円夏、趣味はお兄ちゃんとゲーム、嫌いなのは自己中な奴。お兄ちゃんに近づこうとするなら容赦しないから」

今度は怯えるような視線が集中する。知ったことでは無い。俺達で最後だったようで鐘が鳴る。確か1時間目から授業か。まあ頭に入っている当然の事、聞き流しながらノートだけとっていけば問題無いだろう。また円夏を弄ろうとした時、目障りな蟲二匹が視界に入つて、更に話しかけてきた。

「よう2人目の男性操縦者？精々僕の邪魔をするなよ？」

「……………」

無視を決め込む。この手の輩は相手にしたら凶に乗る。そもそも名字が白陽になったのは昨日、嫌がらせを含めて絶縁状を織斑邸に100枚送ってやったからだ。もう他人だから関わってこない、というのは傲慢なこの男には通じないだろう。

「お前ら！無視をするな！」

「うるさいモップ！」

円夏が我慢できずに反発してしまった。まあ、仕方がない。

「黙れ！お前らは秋十の言う事を聞いていればいいんだ!!？」

モップは木刀を引つ張り出して円夏日掛けて振ってきた。流石にこれは止める。この程度は造作もない。

「離せ！」

「離すわけ無いだろう？目の前で暴力を振るおうとしているなら尚更だ」

「お兄ちゃん…」

円夏は少し震えて俺の後ろに隠れている。流石に武器を使って実行使するとは思っていなかったのだろう。だがそれは正常だ。

「何だお前？千冬姉に似てるな、こっちに来いよ」

「嫌だ、触るな！」

「っ、いいから来い!!？」

無理矢理円夏を引つ張って連れ出そうとした瞬間、俺の中の何かが音を立って切れた。

「触れるな」

「は？」

「円夏に、触れるな!!？」

握っていた木刀を握り潰し、側頭部に拳を叩き込む。そのまま首を無茶苦茶な力で掴み天井に向かって投げる。

ドガツ!!？

鈍い音が響き、落ちた蟲野郎はゆっくり起き上がる。血は出ていないようだが、加減したから当然だ。血が出ていなければ幾らでも隠蔽

できる。周りは口裏合わせをすればいい。金でも何でもいい、してしまえばそれまで。丁度鐘が鳴り、苛ついた顔で睨んでくるが人を殺す笑みで返してやるとビビって逃げていった。

1時間目は係や1年間の大まかな流れの説明。まあ、無難な所だろう。半分ぐらい聞き流して、手元で黒鍵を磨いていた。休み時間はまた円夏を慰めも含めて愛でようとした時、金髪ロールの女が話しかけてきた。

「ちよつとよろしくて?」

「よろしくない。以上」

「んにゃく／＼／＼」

頬をムニムニしてやると気の抜けた声を出す我が妹。可愛い。休憩時間はこうしていないとストレスでこの学園を素手で潰しそうだ。

「わたくしが話しかけているのに何ですのその態度は!?!」

「お前は自分を特別な何かとも思っているのか?そもそもこっちは拒否しているしお前が怒る理由が解らん」

「あなたねえ…!これだから男は!」

「用は済んだか?」

「そんなわけないでしょう!?!?わたくしが誰だか分かって言っているのですか!?!?」

「知ってはいるが、敬意を払う必要もお前を讃える理由も無い。さつさと席に戻るんだな、あの暴君から一撃貰いたく無いだろう?」

「っ!また来ますわ!!?」

「二度と来るな」

また来たら完全に無視するか。何故か不明だがその後暴君が出席簿で俺を殴ろうとして来たので穴を開ける勢いで打ち抜いた。周りからはかなり驚かれたが特に問題をおこしたつもりはない(先の蟲の件は:どうでもいい)のでそのまま授業が始まった。

2時間目はようやく授業:…といってもIS関係の法についてだが。法律全てを教えるとは言わないがこんだからIS中心の思考が蔓延するのでは?何事もIS優先、ではもしこの女尊男卑が解けてIS関係の企業に就職出来なければ、路頭に迷うのは決定だ。ましてそれ

で常識無しとは……もはや救えないな。

俺と円夏は正直ここで習う事は何一つ無いので後で学園長に授業の問題点を纏めて提出する事になっている。余裕があるが故に。

「正直一般人でも知ってる内容を態々授業にするって非効率じゃないか？」

見出しはこれでいいか。後は授業の問題点や抜けた点を書き記す。授業自体はわかりやすいが幾らか余分もある。後はここで言うておいた方がわかりやすい事もついでに。

しかし山田先生は頼りないものの教える側としては特上だろう。恐らく努力型の天才だ、苦勞もしただろうがその経験は今ここで役に立っている。正直、あの暴君が授業をわかりやすく、なんてほぼ不可能では？とまあこんな感じで書いていたらすぐに2時間目は終了した。円夏は……座ってペン持ったまま寝てた。何その無駄スキル？無事2時間目も終わり。身体を伸ばす。疲れるな……。

誰も来ないで平和に休み時間が終わり、3時間目。ああ、あの暴君って人に物を教えられるんだな。学会で発表できるな、これは。とうとうペンを持つのが面倒になったのか円夏は突っ伏して寝始めた。ここまで興味が無いか。

「ああ、そういえばクラス代表を決めていなかったな」

周りは何だそれとは言わんばかりの視線を担任に向ける。文面で分かりそうなモノだが？

「簡単に言ってしまうえば学級委員長の様なものだ。自薦他薦は問わん」

そう言われた途端また煩くなる。

「織斑君が良いと思います！」

「折角の男子だしね」

「何よりカツコイイし！」

阿呆らしい。あんなド素人に代表だと？アレがやるぐらいならそこから辺の一般人でも事が足りるぞ？

「候補者は織斑秋十。他にはいるか？」

あの暴君、少し嬉しそうだな。教師の癖に身内が推薦されて喜ぶと

か、公平もクソも無い。そんな事を考えていたら蟲野郎がこんな事を言い出した。

「なら白陽も一緒だろ！俺だけってのはおかしい」

「それもそうね」

「一応『男』だもんね」

「気は乗らないけどいつか」

「一応言っておくが拒否する」

周りは敵意の視線を一斉に向けてくるが、この程度、息をするのと対して変わらん。

「駄目だ。推薦された者に拒否権は無い」

「機能を果たしているのか分からん耳でもう一度聞け。拒否する」

どいつもこいつも唾然としていた。ブリュンヒルデにここまで反抗するとは思っていないのだろう。

先の報告書に「この学園は世界最強が絡むと一般常識は欠如する」と追記しておく。

「納得がいきませんわ！どうして男がクラス代表なんかに!?!? 恥さらしもいいところですよ!!?」

縦ロールが騒ぎ始めた。無駄に煩い。更にこちらに指差してきてるし：貴族は常に優雅たれ、というものでは？

「そもそも貴方も何ですかあの言葉遣いは？男如きが利いていい口ではありませんわ！」

「ほう？女だったら偉いのか？」

無謀にも俺に口で喧嘩を売るか。井の中の蛙とは気楽でいいな。

「当然ですわ！ISを使えない男なんて、子供を作る以外に存在価値なんて有りませんもの」

「ならISには男が提唱した理論が一切使われていないんだな？」

「は？」

「ISの開発すら女のみで行われているのだな？世界に男はいなくても皆生きていけるんだな？」

「貴方を言ってますの!?!?」

「貴女と同じ事さオルコット嬢。そもそも俺はISが使える以上『I

『Sが使えない男』なんて通じないな。そして全ての事柄において絶対は無い。何かが在り続ける限り、永遠にな」

「そうですかね？私なら貴方に『絶対勝てる』と思いますか？」

「総合操縦時間が1,000時間を越えてもいない奴に負ける程柔では無いよ」

「：ならば決闘ですわ！」

「正直面倒だが受けてやろう。ああそれと、俺が勝ったら代表の座は押し付けてやる。心配せずともクラス代表になれる」

「ふん！貴方は私に手も足も出ないでしょう。ハンデはどれだけいりますか？」

「必要無いな。井の中の蛙の中身を捻り出すだけだからな」

また場が静まり返った辺りで無能教師が発言する。

「：纏まった様だな。今週金曜の3時間目。クラス代表を掛けた模擬戦をする。勝った奴がクラス代表を決める。いいな、オルコット、白陽、織斑」

「は？俺も!?!？」

すっかり置いていかれていた蟲野郎は出席簿の一撃をもらに喰らい、気絶した。今日は3時間で終了なので最後まで寝ていた円夏を姫抱っこで持って帰った。

それが俺の日常だ

セシリア・オルコット、及びクラスを敵に回す宣言をした翌日。授業自体は問題なく進み、早くも放課後。蟲野郎は専用機を貰える云々言ってたがああのモップに引っ張られて何処かに連れて行かれたから知らん。今は教科書類を纏めている。さて、今日は。

「そう言えばお兄ちゃんは訓練、どうするの?」

「手の内を晒すのは面白くないからな。『鋼の鍛錬』のみにする」

「そっか。私は甘い物でも食べてこようかな?」

「今手持ち幾ら持つてる?何なら取っておけ」

財布から万札を2枚取り出す。

「良いの!?」

「ついでに友人を作るつもりで何人かに食わせてやれ。先日とある理由で大儲けしたからな」

『男性操縦者が現れた』。ただこれだけの事で株に凄まじい変動が出た。東さんとシミュレーターで変動値を予測していた俺には得しか無かったが。

「そろそろ行く。食い過ぎるなよ?」

「はい!ありがとうございます」

先ずは荷物を部屋に置きに行く。向かうのは、

「ここが拳法部か。立派な事だ」

場所自体はあくまで建物の中に有るのだが、入口からそれらしくしている辺り流石という所か。中には16人程部員がいた。

「失礼します」

「あら、あなたは…って、男!?」

大声、というか叫びが響く。練習していた後ろの部員なんて頭抱えて倒れているぞ?」

「dededeDEDEDEで何のののののの用かしらra??」

「言いますから落ち着いて下さい」

取り敢えず深呼吸させて落ち着かせる。この人は…アレだ。この

人自体は女尊男卑どころかたの字も無いタイプだ。風潮が理由で男と関わる機会が殆ど無く、いざ男と関わるとテンパる

『女尊男卑女性被害者タイプD』だ。こういう人にはなるべく優しく接しないとならないので扱いが難しい。

「はあー、はあー、えつと、それで何の用かしらっ?」

「場所の一角を貸して欲しいんですよ。あまり周りを見せて良いものでも無いし、環境として丁度いい、と言うのも有りまして。あと申し遅れました、白陽一夏です」

「あー私は『ピュアリ・ホワイト』!血も名前もアメリカだけどこの拳法部の部長やってます!よろしくね」

「よろしくお願ひします」

☆☆☆☆

「それでは始めるかね」

視線の量は尋常ではないが、気にしては鍛錬にならない。上半身に着ているものを全てイクサの拡張領域バスターレットに放り込み、そこから人間の大サイズの金属板を取り出す。ここで拳法部員から質問が入った。

「白陽君、それは何?」

「ISの装甲並みに硬い金属板だ。鉄程度では余裕で穿ってしまうからな」

「そう言いつつ板を投げる。」

「ハアツ!!?」

「ズガツ!!?」

蹴りで上方へ跳ね上げる。そのまま掌打と蹴りを打ち続ける。この鍛錬の真髄は、打ち込んでいる間の10分間、地面に落ちないようにするのが。落とさない速さと浮き上がる強さが重要になる。直感と冷静さが無ければ難しい。大前提として、最低でもこの金属板を殴って無事でいられる程度には強くなければ意味がない。

「鉄山靠!!?」

いつも最後は全力の鉄山靠でめる。

「ガラン、ガラン…」

「割れた、か。また調達しなければな」

やはりというか、衝撃であっさり割れてしまった。自分としてはもっと回数を増やしたいが、これではどうしようもない。

『すーすーすーすーい!!?』

「は?」

「どうやったらできるのあんなの?!?」

「誰に教えてもらったの?!?」

「教えてくれたのはとある格闘家ですよ。多分あの人ならISどころか悪魔や神でも倒せるでしょうけどね」

最近あの道場に行ってないな。『結城流八極拳』。あまり知られてはいない流派だが道場主のあの人は凄まじく強い。身体能力でも技術でも、きつと否絶対敵わないだろう。その後は質問責めにあいながらも意外と拳法部の人達とは打ち解けていた。この鍛錬は試合までの今日を含めて3日間の間続いた。

試合当日。アリーナは満席となっていた。理由としては、やはり男性操縦者2人が戦う事だろう。一部には主席合格した代表候補生を見に来た、というのもあるだろうが。

「あ、お兄ちゃんそう言えばあの暴君先にあのロール巻きと戦えって言ってたよ」

「蟲野郎が使う機体が来るのは今日だったか?」

「多分初期化と最適化が終わってないんだらうね。時間稼ぎさせるつもりじゃない?」

「それはまるで意味を成さんな。所詮、蛙の調理に時間は掛からん」
「手加減上等なんですよ?」

「セーブモードで戦うつもりだが蛙の機体は粉碎してやるさ」

「ふふっ、行ってらっしゃい」

「ああ、行って来る」

生身のまま、ゆっくり歩いてフィールドに出ると、そこには面白い驚き顔の蒼蛙がいた。

見せてもらおうぞ傲慢の果てを

周りの騒めきが聴こえる。大方俺がISを装着していないからだろう。

「何でISを装着していませんの!?？」

「慌てるな。形状が形状でな、『俺が戦っていない』なんて難癖をつけられたくないからな」

右手にはナツクルを握っている。が、これはイクサの待機状態では無かったりする。実はこれは武装展開状態であり、待機状態は口ザリオで、それを奪われた所でこれを使えないようにする為だ。

「始めようか。変身!」

《レ・デイー!》

《ファイ・ス・ト・オ・ン》

全身が白の装甲に覆われ、顔には特徴的な金の十字の意匠が施されている。

「イクサ、最初の聖戦を始めようか!」

周りは驚きに包まれた。イクサの姿はISの中では異端であった。全身が装甲に覆われて何処も露出していない《フルスキン全身装甲》だったからだろう。が、目の前の蒼蛙は気にもせず馬鹿なことを言い出した。

「ふん、聖戦がどうか知りませんが、私が貴方に勝つのは必然。謝れば許しても「そうか、英国の女性は無謀で冗談好きか。覚えておこう」

くだらない戯言を自信満々に言うその様は滑稽過ぎたので途中で割り込んだ。時間の無駄でしかない。ついでだ、この戦いは無傷で勝とう。

「~~~~ツ!なら!」

《試合開始》

「お別れですわね!」

ライフルから放たれた一筋の光が俺に向かって一直線に飛んできた。視認できる程度に遅かった。まるで————虫が飛ぶくらいに。

セシリア・オルコット。その生い立ちや家庭環境を話せば同情する者や尊敬する者もいるだろう。だが彼女の思考は、まともな思考ではないと断言していい程の女尊男卑だった。そしてこの模擬戦も、このレーザーの一撃で終わると思っていた。が、そこにいたのは……傷一つない白い戦士の姿があった。

「これだけか？」

「なっ……!?？」

正直言つて俺はつまらなかった。そもそもたかがレーザー一発で勝負がつくくらいならこの機体はとんでもない欠陥品だろう。と言うよりあの機体でISと対戦したことがあるならいくらクリーンヒットでも一撃で勝つのは無理だと分かるはずだ。連射するならまだしも一発撃つて終わり、とは三流は愚か一つ飛ばして五流もいい所だ。

「どうした？エリートなんだろう？動けよ」

「飛ばしましたの!?？」

「飛ばないISなど欠陥品だろう？まあいい。お前には」

イクサナツクルを外す。これは見た目に反して遠近両用な為使う場を選ばない。

「お前にはこれ一つで充分だ、よく狙えよ？そのライフルが飾りでないなら、的に当てられない方がおかしいからな」

「どこまでも私を馬鹿にして！」

「まあ、何でもいいが……付いて来れるか」

四肢のバーニアを全開に吹かす。発想自体は元々脚部に付けるなら腕にも付けて格闘能力を向上させる、という物だったが、扱い切る

にはそれなりの時間を要した。今となつては自由自在だが。

「消えた!?？」

「後ろだ、ラアツ!!??」

「ぐっ、ティアーズ！」

接近されている上に攻撃までされているというのに今更ビット兵器を出す蒼が…面倒なので蛙は、こちらを見ないまま逃げるように後退した。

「無様だな? お前の勝利が必然なら何故逃げる必要がある?」

「うるさい!!??」

展開されたビットからの攻撃は全て一方向のみにしか飛んで来なかった。しかもライフルと同時に飛んで来ないときた。断言しよう、BT兵器より使い勝手の良い物が出来てしまえば固定砲台にしかないこの蛙はさっさと捨てられる。近接攻撃をしないのは単に出来ないのだろう。

「〜ッ…ミサイル、行きなさい!」

相変わらず単発のビットとそれに加えミサイル。射線を読まれるようではスナイプなど不可能。と言うより何故イギリスの科学者共は遠距離しか出来ない機体を作ったんだ? 戦闘で使うなら中距離型の機体に仕上げるのがセオリーだろう。障害物など一つもないフィールドでどうやって狙撃しろと?

「すまん。どうやら欠陥機に乗っていたのはお前の方らしい」

「何ですって!?？」

迫るレーザーにミサイル。だが、正直避けるのは飽きた。決着を付けるか。

「避けないのならただの的ですよ?」

さっきまでの前に当てられていなかった蛙が何か言っているが、それは俺に当たる前に霧散する。見えない壁に阻まれるように。少し口角を上げて、呟く。

「ステルスモード、解除」

何も無い空間から現れたのは、イクサよりも巨大な大楯だった。フワリと浮いたそれは俺に付き従うように左側に静止する。

「それは…まさか!」

「そうだ、これが俺の機体で唯一の《非固定浮遊部位》、『スヴェル』だ」
名は北欧神話の盾から取った。イクサ、それはありとあらゆる人間が恐れる太陽の如く。それに従う盾は永遠に落ちず、何一つ燃え上がる事は無い。

「…さて、いい加減墮とされる覚悟は出来たか？」

「ヒッ!」

無駄だというのにまだビットは俺を撃ってくる。溜息を吐きながらナツクルの引き金を引く。

ズダンッ!

その瞬間、二機のビットが消滅した。破壊した本人(と、それを元々知る妹)以外は時が止まったようだった。

「最低出力で撃ってこれか。此方が強すぎるのか、もしくは向こうが脆すぎるのか」

まあ、それはいいか。残りの四機も落とそう。

ズダンッ!ズダンッ!

二枚抜きが出来る少し面白い。今度最大出力で試してみるか。固まっている蛙からライフルを引っ剥がす。

「フン!!?」

バキッ!

へし折ったそれを適当に投げる。蛙の目は、

俺好みの絶望した目が変わっていた。ゆっくり、ゆっくり近づく。

「さて、現時点でお前の武装は無い訳だが、何か言う事はあるか？」

「あ、あ、」

「そうか。ならそろそろ……眠れ」

打つ、打つ、打つ。一撃毎に装甲は割れ、吹き飛ばしたらスヴェルで此方へ弾き、再び打ち込む。三度程それを繰り返し、上に跳ね上げる。

「精々意識を飛ばして懺悔しろ」

《イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ライ・ズ・アツ・プ》

フェッスルをセットしたイクサナツクルを掲げ、引き金を引いた瞬

間、辺りは閃光に包まれる。

『『プロウクン・フアング』!!?』

撃ち出された雷撃は蛙の機体を易々と貫いた。まあ、死んではいな
いだろう。ISの保護機能は伊達ではない。が、落下して打ち所悪く
て死亡、と言うのは笑えないのでスヴェルで受け止めて地上に降り
立った。それと同時にイクサは消えるように解除される。

『し、試合終了…勝者、白陽一夏!!?』

ドン、と聞こえた気がしたすぐ後に、歓声が響き渡った。先程まで
の静寂は何処にも無い。

「…意外だな」

これも無知故か。気楽なものだと思いつながら少し気分を良くして
盾に蛙…オルコットを乗せながらピットに戻っていった。

俺を呼ぶなら

ピットに戻ると、其処には円夏とダリルさんがいた。

「よ、お疲れさん」

「大して疲れてませんがね。で、何でここに？」

「私が山田先生に『友人です』って言ったら簡単にOKしてくれたよ」
「緩っ！」

つくづく大丈夫かIS学園。まあ今に始まった事ではないだろう。
…寧ろその方が問題だが。

「そう言えばこの後は直ぐに次か？」

「まあ大方暴君が俺を休ませないつもりでそうしたんでしようけど…
俺としては愉しんでましたが」

「あの会話全部聞こえてたから多分愉悅してるんだろうなーって思っ
てたけど。やっぱりそうだったね」

「当然だろう？そろそろ行くぞ」

「1つだけ忠告してやるよ、なんか仕掛けられてるかもしれないねーから
気をつけろよ」

「…わかりました。警戒はしますよ」

そう言いながらピットから歩いてフィールドに出た瞬間。

「！」

バラバラッ！

銃弾が飛んできたので片手で側転して躲す。其処には蟲野郎とは
別に五機のISが浮いていた。中にはモップまでいる。

「何のつもりだ？」

「フン、あんたの勝利なんてまぐれよ、だから私達頼まれたの。織斑先
生に、あんたを叩き潰せつて！」

「聞いたか2人目!?千冬姉は俺を勝たせたいんだ！大人しく踏み台
になれ!!？」

まだイクサを展開してもいないのに一切の躊躇も無くライフルを
撃つてくる。地上で躲し続けるのも無理があるのでワイヤーと黒鍵
を出し、ワイヤーを天井に向かって投げる。尚、これは

『対IS用兵装』と呼ばれる物であり、普通に使うならば危険過ぎて使
用できないが、IS相手ならこれだけの物が必要だった為に束さんが
作成した物である。

「なっ!??!」

「飛んだだと!??!」

「不正解だ」

傍目には浮いているように見えるが実際には引っ掛けたワイヤー
からぶら下がっているだけだ。このまま戦ってもいいが後が面倒に
なりそうなので邪魔されない内にさっさと展開する。

「変身」

苦情が来たので変身音は省略させて頂く

(→メタ発言ツツツ! by作者)。

「さて、死ぬ覚悟は出来てるな? ああ何も言うな、答えは聞いてない」

「そんなIS一機でこの数を倒せるとでも!??!」

「まずは煩い雌共を掃除してやるか」

そう言った瞬間、イクサの十字架が開き、2つの赤いカメラアイが
露出する。煙を出して排熱処理を終え、イクサはようやく元のポテン
シャルに戻る。まあ、あくまで『競技用』レベルだが。

「姿が変わった!??!」

「イクサ、『バーストモード』だ。以後お見知り置きを」

この姿になってさえしまえば誇張抜きで負ける事は無い。なにせ、
セーブモードの2倍の出力が有るのだ。さあ、始めようか。セーブ
モードでは使っていなかったカリバーを抜く。飛んでから銃弾は全
て斬り伏せた。

「弾幕どころか連携も無いか」

ただ闇雲に撃つだけでは幼稚な遊びと変わらない。さっさと落と
そう。ナツクルのチャージは既に終了している。右手にナツクルを
構えたままスヴェルを動かし、モップと蟲を除いた4機を一箇所に集
める。相手は誘導された事にも気づいていないだろうが。

「イージー過ぎるな、『ブrouクン・ファング』!!?!」

「なっ!??ちよ、あんたどきなさいよ!」

「あんたがどけばいいでしょ!??」

「煩いわよ!」

「もう間に合わな、いやああああ!??」

ついでに言っておくと絶対防御を破れるレベルの高電圧にしてある為、打たれ方が悪ければ内臓を易々と焼くだろう。少しやり過ぎな気もするが、こいつらにI Sを使う資格は無いだろうから。

「いくらI Sを纏っているとはいえ、やはり臭うな」

焦げ臭い。まして人の体は特に。この戦闘¹がトラウマになつてくれればこいつらはもう偉ぶる事は無いだろう。

一方、周りはハラハラしながら俺を見ていた。何でこのような状況になっているのか分からないのだろう。更についてを言えば先の会話は聴かれている筈なので暴君がああ雌共を送り込んだ事を皆知っている、ということになる。

「つと。何故猪がここにいる?」

「黙れ!卑怯な手を使って恥ずかしく無いのか!??」

「それをお前らに言われたくないな」

突っ込んで来たモップ型猪の突進を躲す。というか先まで見てなかったがまさか近接のみを狙っていたわけではない:よな?センサーで確認すれば後ろには蟲野郎。挟み撃ちするつもりらしい。

「面倒は嫌いなんでな:開けスヴェル!」

その声が終わる前にスヴェルが3つに分離する。2枚の双刃カッターが蟲野郎の腕を捉えて壁に張り付けにする。流石にこの問題児共を同時に相手にするのは精神的に疲れる。何か蟲が喚いているが俺にはそれが言葉と認識できない。

「このっ!」

「遅過ぎるな」

「早く秋十を離せ!」

「お望みどおりの一対一の正々堂々だぞ?何を怒る?」

「黙れ!お前があんなものを使っているのが悪い!」

滑稽すぎる。

都合が良すぎる。

自分勝手すぎる。

馬鹿馬鹿しすぎて目も当てられない。動きはトロい、剣は大振り、それで更に当たらない。この猪モップはこれだから束さんに

『私が才能を持つて行き過ぎなければもつとマシな人間に…』なんて言われるのだ。早く終わるのがつまらないから避け続けているが、本当にこの猪モップは剣道しか能が無いらしい。

「或る意味馬鹿の一つ覚えか」

「誰が馬鹿だと!?!」

「激昂するなら心当たりがあるんだな」

「~~~~ツツツ!」

もう口に出せる事が無いのか黙って剣を振り続ける。元々雑だったが更に雑に磨きがかかっている。そろそろ頃合いだろうと思いきりバーのガンモードを構える。スヴェルのマシンガンはオートで猪モップをロックしている。

「精々逃げ回れ」

「銃なんて使うな卑怯者が!!?!」

「獣を殺すなら飛び道具が一番だろう?」

このやり取りの間もただ真つ直ぐ進んでくる猪モップは、自分から当たりに行っているのかと思う程弾丸を喰らっていた。

「このおおお!!?!」

「ハア…堕ちろ」

叩き墮とす。そう決めた俺は拳を握りスヴェルのパイ^杭ルバ^打ンカ^機ーをセツトする。そしてそれをー思いつきり振り下ろす。

「なっ!?!?ガハツ!!?!」

一気に加速してモップを捉えたまま地面に激突、更にトドメのインパクトが放たれる。煙が晴れるとそこには気絶したモップがー…? ?

「さて後はお前だけだが」

カッターが回転しながら戻って来る。盾には戻さず三つに分かれたまま浮かせる。

「てめえよくも箒を!!?」

「ルールに則って落としたただけだが何か?」

「ここで勝つていいのは俺だけなんだ!邪魔ばかりしやがって!!?」

「何様だ、お前」

「お前が出てこなけりやハーレムだったのによ!!?」

「ハア:念の為言っておくが聴かれています?」

「煩い!勝った奴が正しいんだ!!?」

喚くだけ喚くと蟲の武器が開き、光を放っていた。

「分かるだろ?この零落白夜があれば、お前なんか!!?」

そう言いながら突っ込んで来る蟲。思い知らせてやる為にも俺はそれを敢えて受けた。

「終わりだ:!!?」

剣が触れる瞬間、黒い閃光が走る。渦を巻くそれは易々と弱者^{秋十}を吹き飛ばす。

「グアツ!!?」

無茶苦茶な程の力を持つ黒い嵐は中から斬られる形で崩れ、頭われたのは異様なオーラを纏うイクサの姿だった。

「……………」

「何なんだよお前!!?」

「何、と?」

「その眼に己の事しか見えぬお前には解らんよ」

「万昇^{ばんしょうあんなや}暗夜。白き夜は夜にあらず」

「教えてやろう、半端者。如何に自分が弱いかを」

「力の狂信者如きに負ける事は『無い』」

「言わせておけば!くらええええ!」

「コマンドオーダー
C・Oシステム起動」

青い光と共にシステムを呼び出す。この場で要されるのは必断の一撃。つまり、それは—————

「『一刀両断』!!?」

ズガアアン!!?

居合の要領で振られたカリバーは零落白夜、もとい雪片を容易く斬り裂いた。

「何でだ!?? 何でだよ!!? お前なんかに、何でこの雪片が!??」

「言っただろう、解らんと。終わりだ…!」

掲げられたカリバーにそれを覆うように万昇暗夜のエネルギーが黒い渦となる。一瞬、収束したそれは爆発したように膨張し、黒光の剣と化す。

「お前なんかにいいい!」

使い物にならなくなった雪片を投げ捨て、殴りに来る蟲。狙ってくれと言わんばかりだ。

「終わらせよう」

「ああああ!!?」

「ゆめまぼろし夢幻に消えて行け」

「『げんむ幻夢、ぜろ零』!!?」

フツ…ズアアアアン!!?

本当に僅かな静寂の後、斬られた蟲は殆どIS部分が無い状態で地に堕ちた。頭から行つたがこの際どうでもいい。

『勝者!!? 白陽一夏!!? 見事この謎の乱戦を勝ち抜きました!!?』

実況? の声と同時に歓声が上がる。蟲を一瞥してイクサを解除し早々にピットに戻った。

…これで終われば良かったのだが。俺のピットには暴君が仁王立ちしていた。正直邪魔なのでどいてほしい。

「白陽、お前のISを寄越せ」

「断る」

「いいから渡せ。あの機体は秋十が使うべきだ」

「断ると言っている。お前の命令に従う理由は無い。ここは軍隊ではない、間違っている事は指摘するのが正解だ」

「黙れ！どうせ何かイカサマをしたんだ、そうに決まっている！でなければ秋十が負けるものか！」

「阿保か。イカサマなんてあの雑魚には必要無い」

「煩い！」

とうとう手を出してきた暴君。軽く避けて腹に二割程の威力の蹴りを入れるとあっさり吹き飛んで二転三転して地に伏せた。

「この化け物め……！」

「お前みたいなのが皆人間なら化け物の方がマシだな」

「くそっ！」

「あと今の一部始終はISで録画させてもらった。減俸待った無しだな」

「待て！」

「ああ最後に言っておく、俺の事は『正義の味方』と呼びなさい」

それだけ言って学園長室に向かい先の事を学園長夫妻に報告した後、部屋に戻った。

夜。少女は門の前に立っていた。風に彼女の髪は揺れている。

「IS学園……」

星など見えぬ空を見ながら小さく、けれどしつかりとした声で呟く。

「やつと会えるんだね、一夏、円夏」

少しの笑みと共に少女は門をくぐった。愛する男に、会う為に。その腕には、黒いブレスレットが光っていた。

再会と暴露と告白と

俺の愛する少女の話をしよう。彼女と出会ったのは強い雨の日。俺がまだ中学生だった頃の、それも夜の話だ。

「今日も遅くなったな」

傘をさしながら夜の街を歩いて行く。飛び級をして多くの事を一気に学ぶ俺は、帰る時間が遅くなりやすい。それ故に今日もまた、帰りが遅くなっていた。家には円夏の外にその間の留守を任せている姉貴分と妹分がいるので、言う程急ぐ必要は無い。

「ハアツ、ハアツ、」

(何だ?)

少女が息を切らしながら自分のすぐ横を傘もささずに走って行く。ただ何故か後ろをチラチラ見ながら走る様は俺に違和感を覚えさせた。

「おい、どっち行った!?!?」

「向こうだ! 逃がさねえぞ!」

数人の男達が先の少女が走って行った方向に走って行った。

(まさか...いや!)

自分の第六感に従ってそれを追う。こんな簡単に偶然が重なる筈は無い。イクサのセンサーを部分展開し、コア人格AIに要請する。

(『シロ』! 先の少女は何処へ行った!?!?)

〈あのビルの間。男達の反応もある〉

「向こうか!」

黒鍵を構え、ただ走る。例のポイントに入ると、少女は行き止まりに追い詰められていた。どう見ても危険な状況だ。

「そこまでだ!!?!」

「ああん? 何だテメエ?」

「その子に何をしている!?!?」

「織斑秋十ってのが、こいつをいたぶれば金をくれるって言うから

よお」

「それに協力してやってんだ。文句あるか？」

男達はそんなくだらなすぎる事を言うが、少女当人はと言うと、
「助けて…、知らないの、何にもしてないのに、私…」

怯えていた。よく見ると目の隈が酷く、疲労困憊の体である事は間違いない。ならばこれに慈悲は要らない。

「見つかったから引く、という気は無いんだな？」

「当たり前だろ、な？」

「つーかお前この人数に勝てると思ってるのか？」

見た所5人程か。ああ、愚かだ。

「我欲の為だけに1人の少女を苦しめた報い…代わって俺が執行する」

「何わけわかんねえ事言ってるやがる！お前ら、やっちまえ！」

「馬鹿者めが、『その命、神に返しなさい』」

黒鍵で一斉に襲ってきた患者どもを一閃する。たったそれだけで、皮は裂け、血の匂いがした。

「なあああ!!?」

「最後に聞いておく、退くつもりは無いんだな？」

「ヒイツ！」

「悪かった、悪かったから！」

「なら行け」

そう言われて慌てて逃げて行く患者ども。が、俺はそこまで優しく
ない。

「生憎俺は気分が悪い。痛みは一瞬だ」

背後から一人の男を蹴っ飛ばしてそれに巻き込まれる形で全員が
転がり、伸びていた。そこまでしてようやく、俺は少女の方を向く。

「怪我は無いか？」

「…うん。でも、何で」

「俺の名は織斑一夏。お前を傷つけようとした屑蟲の双子の兄だ」

目を見開いて驚いている。まあ、当然か。

「先に言っておくが屑蟲姉弟と俺は別居している。そもそも俺にお前

を害する理由はない」

「：なんか、ワケありみたいね。私は嵐鈴音、助けてくれてありがと」
そう言いながら立ち上がる嵐。雨に降られてかなり体は冷えている筈だ。

「言っておくが、お前の家は屑蟲の家に近いのか？」

「ええ。見つからないように帰るのが大変だけどね」

「なら帰るのは止めておけ。屑蟲が先の事を指示したなら家の近くを張られているかもしれないぞ」

「：でも、どうしようもないじゃない」

「ならば俺の家に来い。一宿一飯くらい用意するのはわけないからな」

「いいの？メリットなんて無いでしょ？」

「これは単に俺の気紛れだ。大体いつまでもそのままだと風邪をひくぞ」

「ならお言葉に甘えさせてもらうわ。あとなんて呼べばいいかしら？」

「一夏でいい」

「なら私も鈴でいいわ」

「わかった、なら急ぐぞ」

そう言いつつ鈴を抱える。この距離なら余裕だ。

「ちよつと、何するの!?」

「舌噛むぞ」

「ええええええええ!?」

ブースターを展開し雨を切る速さで飛ぶ。鈴に荷がかからない程度に加減しながら。

その後はまあ色々な事が有った。姉貴分が天下御免の天災篠ノ之束だった事や俺がISを使える事に驚いたり、後にシヨツクの強い1日だったと鈴は語る。

その後あまり人に言えない方法で鈴の問題は解決した。ざっくり言うなら屑蟲の息のかかった不良チームを5、6程潰した後、匿名で

織斑邸に脅迫文を送り付けたのだ。なお、鈴が目をつけられるようになった原因は、屑蟲が

『鈴が虐められているところを助けてハーレムに入れる』という計画を聞いてしまったかららしい。

それ以降鈴とは皆で遊びに行ったりと、友人としての付き合いは続いた。特に中学2年の頃は学校の後でうちに来る事が多くなった。両親の仲が険悪になってきたらしい。そしてそんな話を聞いた半月後。鈴は帰国する事になった。

「離婚、か」

「うん。帰る事になっちゃった」

場所はある坂の上。もう夕暮れ時だ。

「離婚したらどっちについていくつもりなんだ？」

「母親の方。両親も最初からそうするつもりだったみたい」

「このご時世では仕方ないな。お前としては、こちらに戻って来るつもりなんだろう？」

「ええ。アンタがIS学園に入るなら、代表候補生にでもなって会いに来るわ。でね、その…」

「私が麻婆毎日作るって言ったら、食べてくれる？」

顔が真っ赤なのは夕日のせいではないだろう。もともと、その返答は決まっていた。

「ああ、楽しみにしていよう」

「!!？」

「俺がこんな事を言うのはおかしいかもしれないが、待っているぞ」

「一夏あつ!!？」

俺の腕の中に飛び込んで来る鈴。どうやら泣いているようで、顔は見ない事にする。

「ぐめん…」

「気にするな。このまま行くと次会うのは1年と半年後か」

「絶対、こつちに戻って来るから！東博士にも色々教えてもらったし！」

「ああ、それでは、」

「またな」

「またね」

それ以降、お互い連絡はとっていない。ああ言った手前、途中で連絡をとるのは、鈴に失礼な気がしたからだ。だが、それももうそろそろだろう。そう思いながら意識を現在へと戻す。

「ということ、クラス代表は織斑秋十君に決まりました。頑張ってくださいね」

現在、HR。山田先生がクラス代表を決定した事を話していた。

「何で俺が!??そこの2人目辺りにやらせれば!」

「面倒だ。後は勝者の特権だ」

ここまでは言えば文句は言えまい。事実屑蟲は黙る他なかった。

「次の授業はアリーナで行う。遅れるなよ」

さて、専用機持ちの面倒な事をしなければならぬ。

「それでは専用機持ちにISの基本的な飛行を見せてもらう。織斑、オルコット、白陽兄妹、試しに飛んで見せろ」

その言葉にクラスの視線は円夏に集中する。まだ円夏は自分のISを見せてないからな。本人はまるで気にせずに旋風・破邪を展開する。なんて言ってる俺は既に装着済みなのだが。

「すごい…」

「着物みたい…」

「しかも文句言えないだけ似合ってるっていう…」

破邪の装甲は割と薄く、見た感じでは赤紫色の着物のようになってる。そもそもISに装甲はあまり意味が無い為、これもまた一つの完成形である。

「行くか」

「うん」

同時に急加速し、アリーナの天井部に到達する。屑蟲はまだ手こずっているようで、それにオルコットが何か言っているが、大方その後綺麗事という名の戯言で落としたのだろう。雰囲気的に何処と無く親しげだ。男を見る目が無いな…。

『次は降下だ。10センチで停止しろ』

まだ屑蟲は追いついてすらいないんだが。取り敢えず軽く急降下し、10センチちょうどで停止する。円夏も当然、とでも言いたげな表情だ。暴君はつまらなそうだが。オルコットは8センチと少しずれ、屑蟲はというと、

「うおおおおお!!?」

ズ、ドンツ!!?

…思いつきり墜落している。よく俺との試合で死ななかつたな。それを見て半数程が呆れ顔だ。今このクラスは普通に過ごす分には問題が無いものの真つ二つに割れている。織斑派と反織斑派だ。この前のクラス代表決定戦の時の屑蟲の発言で不信感を持った人間がかなりいるのだ。おまけに俺にボロ負けし、俺はどこまで行こうと自然体。勝ったところで驕るわけでも周りから孤立しようとしているわけでもない。それ故にあの屑蟲の小物感がより一層目立っているのだ。

「クソッ!何で他のができて俺にはできない!?!」

「…それ、後で直しておけよ」

「んなこと言ったって千冬ねっ」

ズバン。

暴君に思いっきり出席簿でぶん殴られてひっくり返る屑蟲。身内でもなければ裁判沙汰だな、これは。そのままよくわからない空気になつて授業は終わった。

「ねえ白陽君、今日隣の2組に転入生が来たんだって」

「こんな時期に？」

大方機体の用意が遅れた代表候補生だろう。脳裏に浮かぶのは、やはり彼女の事。

「まあ専用機持ちは1組と4組にしかないし、織斑君なら大丈夫だよー」

「勿論だ！専用機持ちでもないのに俺に勝てるわけない！」

何処から来るんだあの自信。やはりクラスの半数が諦めが混じつた胡散臭そうな目を向ける。

「その情報、古いよ」

「…鈴」

「久しぶり、一夏」

鈴の目は寂しそうで、嬉しそうだった。この空気をぶち壊すように屑蟲が口を開く。

「鈴じゃないか？転入してくるなら連絡ぐらい寄越せよ」

「誰？アンタ」

鈴の対応は辛辣だが、当然といえば当然だろう。寧ろ、何故この屑蟲は普通に話しかけたのだろうか？

「俺だよ、中学一緒だっただろう!?」

稀少価値とはステータス

殆どの生徒から魂が抜けた状態で昼休みの時間。円夏は『コーヒーガブ飲みとかやだから2人でごゆっくり』と言いながら早々と食堂に行った。多分気を遣つてくれたのだらうと思い、鈴と屋上に向かうとしたのだが、案の定屑蟲が

「おい鈴！その2人目とはどういう関係なんだよ!?!?」

「あなたには関係無いでしょ？旦那様よ、だ・ん・な・さ・ま♪」

片手で弁当箱のような物を持ったまますりすり甘えてくる鈴。今まで会えなかったからか、反動ではないが甘え方が何となく犬猫っぽい。

「取り敢えず行くか」

「そうね♪」

「っおい！待てよこのド貧乳!?!?」

ブチッ!!?

「今なんつった三下アアアアア!?!?」

ドメギツツ!!?

「ブホッ!?!?」

鈴と完全にシンクロした動作で屑蟲をブン殴った。だがこれは最も吐いてはならない事を…屑蟲は4、5回転しながら地に落ちた。

「……………」

伸びている。気絶したようだがまだ気が済まない。

「ちっ、まだ気が済まんが…」

「もういいわよ。早く行きましょ?」

「そうだな、っつと」

「へっ?」

軽く鈴を両腕で抱える。それにしてもつくづく軽い。今の鈴の状態は、所謂お姫様抱っこと言うやつだ。啞然とする周りを他所に、足早に屋上に向かった。やはり視線を多く集める。その間鈴はと言う

と、

「あああああああああああゝゝゝゝ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
／」
頭から煙を出しながら小さくなっていった。

ようやく屋上。鈴はまだ頭から煙を出しているが、取り敢えずある程度戻ったらしい。

「は、早く食べましょ…早速麻婆作ってきたから」

「そうだな、では最初に」

鈴を目の前に引き寄せる。まだ赤い顔は今どうなっているのかわかっていないようでポカンとしている。

「鈴を味わってからな」

…ちゆ。

ゆっくり、味わうつもりで柔らかそうな鈴の唇に口付けた。こんな事、円夏がいたらとてもじゃないが出来ないな…。

「んう…う…ぷはあ…」

ほんの2、3秒の口付けを離すと潤んだ瞳で俺を見る。正直ここで止めるのは少し勿体無い気がするが、是非もなし。

「…すまん。俺も少々抑えられなくなっていろいろらしい」

「気にしないで、私もだし…それはそうと麻婆食べましょ」

「ああ。いただきます」

口にした麻婆は即座に甘い思考を香辛料の刺激で埋め尽くした。辛い。辛い。だが旨い。少しだけ俺が作るものとは味が異なるがそれもまた良し。

「どう？ご期待通りの味だったかしら？」

「最高だ。他人の作る麻婆なんて久しぶりだからな、中々染みるよ」

「そう言えばあんた何で麻婆にハマったんだっけ？」

「不思議な人々が集まるアーネンエルベという喫茶店が有ってな？俺

も良く行くのだがそこで偶々隣の席になった男の人が色々話してくれてな…一度持つて来てくれたのだが」

「それが激辛で見事にハマった、と」

「そういう事だ。ちなみに俺の黒鍵の原型はその人から渡されたものだったりする」

「何者よ、そいつ?」

「さあ?その手の場で名前を聞くのもな…最近では会ってないよ」

雑談をしながら食べ進める。にしても本当に旨い…。

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした。あ、あとクラス代表って結局誰よ?」

「あの屑蟲だ。まあ取るに足らんだろうよ」

「うわっ、めんどくさ…」

と、まあこんな感じで会話して教室に戻ったのだが、教室は魂の抜けた生徒しかいなかった。だいたい俺のせいだがな。

氷結解除で（約2ヶ月ぶりに）俺達、参上！

魂が抜けた教室が暫く続き、クラス対抗戦。その間自分のクラスにまるで興味が無かった俺と円夏は鈴のトレーニングに付き合っていた。多分、というか120%この学園の上位どころか世界レベルで考えても圧倒的に違い過ぎる實力を持つている俺達は、何を訓練するにしてもついて来れるのは自分以外の2人しかない、というのも理由の一つである。そんな日の朝。

「ん？」

起きた俺の手には赤いUSBメモリの様なモノが握られていた。炎の意匠があるが…。

「どしたのお兄ちゃん？」

「コレ」

「うわあ…」

それを見た円夏は思いっきり顔を引きつらせている。どう考えても天災姉貴の品だろう。つーか不法侵入だろ…呼べば行くのに。よく見るとボタンがあるのでまずは押してみる。

【HEAT！】

「……………」

「これだけ（か）？」

取り敢えずこれは少しいじっただけで爆発、なんて事は無いようだが…。

「コレが何にせよ説教決定だな」

「…ねえ、これも…」

そうやって円夏が見せたのはフリルが沢山付いた服。明らかに置いていった本人の趣味だろう。実際円夏はこういうのが似合う。普段こそシンプルだが俺が言えば着る。俺がいうのも何だが流石ブラコン。

「やっぱりお兄ちゃんもこういうの、好き？」

「円夏か鈴が着る分にはな」

顔を逸らしてボソツと「鈴姉にも伝えとかなきゃ…」と言った気が

するがスルーする。それにもういい時間だ。

「さっさと着替えて行くぞ、円夏」

「あっ！待って待って〜！」

鈴には話す事がある。この学園は何処までできるのか、見ものだな？

「やっと合法的に殴れるわね。あの屑！」

「思いつきりやっちやえ鈴姉！」

「お前ら落ち着け」

ピットにて。クラス対抗戦のカードは1組対2組、3組対4組とベターなものになった。勝った2人と負けた2人が後に戦うというのも定番だ。そう言えば残りの2人は知らないな…まあ大した問題ではないが。

「鈴コレを」

「何？」

「恐らく遅刻どころか基本ルールが通じない兎お手製の品だ。念の為持っておけ」

渡したのは例のUSBメモリ。襲撃予定がある今日、コレが来たのは偶然ではない筈だと思い、言葉通り念の為に渡しておく。

「見た目おかしい所は無いけど…」

「何を仕込んでるかは解らん。だがあの兎は俺達の害になるものは造らない。それは断言する」

「それって信頼してるのかしてないのか微妙な感じがするんだけど」

「それは東さんの自業自得だと思うよ鈴姉」

「「はあ…」」

3人同時にため息を吐く。昔に比べればだいぶ自重できるようになったが、やはり三つ子の魂百までも、か。

「まあ、なんだ。行つて来い」

「屑がぶっ飛ばされるの期待してるからね！」

「分かってるわよ。じゃ、行くわ！」

鈴は勢いよくピットから飛び出して行った。

Rの怒り／荒れる炎とフライト&ガン

ピットを出た私を待っていたのは（当然といえば当然だけど）同じ空気すら吸いたくない屑蟲だった。視認するだけで軽くイラついているが取り敢えず抑える。

「随分遅かったなあ？お前なんか俺を待たせていいとでも思ってるのか？」

「は？」

「まあいいさ、ここで前の事を謝れば手加減してやるよ」

「謝るって？アンタが屑でゴミで蟲で七光りで

『まるでダメな弟（笑）』略してマダオだって暴露した事？」

「なっ…」

脚色しすぎ？寧ろ前回言ってなかっただけ。こいつを罵倒する為のボキヤブラリーはまだまだ尽きない。理由は色々あるけど強いて言うならこいつに散々な目に遭わされてきたから。

【試合開始】 ビーッ！

「ふざけるなこのチビが！」

叫びながら突っ込んでくる屑蟲。…こいつ、一度ならず二度までも

…！

「潰す」

機体の特性については一夏に『脳筋仕様』とだけ言われて大体察していたので新装備のエリコンライフルとチェーンガンを展開する。

ピーーーー

独特の発射音を出すチェーンガン。所謂豆鉄砲だけど当たると面白いくらいSEを削る。…ヘッドギアみたいになってるからちよつと変な感じがするのは別の話。

（アクセル！解ってるわね？）

【当然さ、マスター！】

（OK！龍砲の制御は任せるわ）

【アイアイマム！乱れ打ちだー！】

アクセル。この甲龍に搭載されているAIで、現在本国で進行中の

『First・Ribekuプロジェクト』の一環として作られた試作AI。製作者側からは

『マルチロックオン作るぐらいならこっちの方が圧倒的に早い』

との事。要するに操縦者とAI二人(?)がかりでやれば沢山狙えるというシンプルなシステムだ。でもそこはAI、柔軟にもっと沢山の仕事をしてくれるが今は割愛。

「ぐおっ!??・正々堂々戦がつ!??。」

「鏡見てきなさい!」

【仁義なき戦いつて知ってるかオラー!】

遠距離武器を持っていないらしい屑蟲は成されるがままだった。

【:あんまり面白く無いなあ】

アクセルが言う通りあまり面白く無い。正直もつと痛めつけたいし、不完全燃焼も良いところ。そう思った私は龍砲以外の装備を全て解除した。そのかわりに展開したのは連結させた双天牙月。

そしてそれをー

「ふんっ!」

思いつきり投げた。が、それは掠るか掠らないかのギリギリで層の横を通過した。

「ふ、ハハハハハ!!?・なんだ、今までののはまぐれか。死ね!」

ただあれが当たらなかっただけでまだ重火器の類は残っているのに、勝ちを確信したのか突っ込んでくる。

「はあ:私が言うのもなんだけど」

【HEAT】!!?・マキシマムドライブ!!?

「ラアアアアアッ!!?」

ザシュー!

「獲物を前に舌舐めずり:三流が丸出しよ」

ボンッ:ドカアアアアアアッ!!?

【し:勝者、凰鈴音!】

【ある意味僕等も舌舐めずりしてなかった?】

「どこを部位破壊するか考えてただけよ」